



Title	一聴講生に映じた松山先生の憶ひ出
Author(s)	中川, 幸三
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 96-102
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

十一年五月から三十三年四月までは萬朝報に、それぞれ主筆として在社したが、それらの新聞は手許には揃っていない。萬朝報を退社して同年七月に朝日新聞に再入社するまでの間に、三十二年の最初の支那旅行の紀行「燕山楚水」を出版したが、それと同時に、涙珠唾珠に次ぐ第二の自選文集を出版するつもりで、雑誌新聞の切抜や謄寫原稿を集めたものが残っている。目次や表紙の原稿もついているが、紙が破れて書名のところがわからなくなっているのは殘念である。その中には臺灣日報、萬朝報から選んだものの外に、「二十六世紀」「國力」などの雑誌に執筆したものが見えて居り、燕山楚水に附録されている禹域論纂とともに、この時期の父を知る資料である。

なお臺灣日報は、昭和十五年に、當時臺北大學に居られた神田喜一郎博士に依頼して搜してもらつたが、博士

一 聽講生 に 映じた 松山先生の憶ひ出

中川幸三

は苦心捜訪の結果、臺灣總督府の倉庫に残っていたのを発見され、それを謄寫せしめて送つて下さった。それは署名のあるものと無署名のものに及んでいた。これが機縁となつて、その臺灣日報は總督府から圖書館に移管されることになつたといふことであるが、今日どうなつてゐるであろうか。いづれにしてもこの謄寫は今日では誠に貴重なものとなつた。臺灣日報では父は湖南、黒頭尊者、黒頭の筆名を用いてゐるが、萬朝報では潛夫と署してゐるものが多い。萬朝報はどこかで捜して調べて見たいと思いながら、まだ果してゐない。

以上が大體私の手許にある父の朝日新聞再入社までの時期に關する資料の主なものである。私は目下父の全集刊行の準備をしてゐるため、自分の關心のままに、このようなものを書いてしまつたが、無味乾燥の文字で讀者を悩ました罪を謝して筆を擱く。

松山先生、名は直藏、字は子方、春城はその號である。兵庫縣明石市二番丁、舊明石藩士、七三の子、母堂

は幾江、明治五年一月七日、母堂の里方、大久保村在の橋本氏の家で生れられた。先生二十三歳の時、父君は腹

部の腫瘍のため、大阪の高安病院で歿せられたので、家を擧げて、東京小石川傳通院に傍に移られた。明治三十年、廣島高等師範學校教授となつて赴任。廣島市國泰寺町に住し、大正五年懷德堂復興によつて聘せられて、堂の教授となり、大阪王出千本通五丁目に住はれた。學を講すること十一年。昭和二年二月病を發し、療養効なく、同年四月二十三日逝去された。享年は五十七歳。先塋の地 明石市本立寺に葬る。

明石市本立寺は日蓮宗。舊明石藩儒官で詩名の高い梁田鶴巣及びその裔累代の墓がある。松山先生の墓は、同寺の塋域に、昭和三年四月に建てられたもので、一昨年四月二十九日、私は木村先生に陪して、堂友の諸君と展墓の機會を獲た。寔に久しう振りである。戰災に罹つて往時の堂塔は鳥有に歸し、境内は、未だ十分に復興されてはゐなかつた。然し、先生の墓は、柵こそ戰時中に供出されて亡せてゐたが、墓碑は依然として在り、狩野先生の筆に成る溫良院崇文春城日德居士の十一文字に並んかに讀めた。

夫人は名は市子、河野氏、廣島市己斐に生れて、三井物産會社元要職に在つた河野渉一氏、テレビの料理番組

で知られた河野貞子氏の姉君に當る。天性、溫良貞淑、松山家に嫁し、氣大しい姑君に事へて、克く孝養を致され、先生が屢々大患に罹られた際には、邊幅を修めず、獻身看護をつくされたこと等、聽講生にも印象は深い。未亡人になられて、東京都赤羽なる嗣子、堯さんの許で老を養はれてゐたが、昭和三十九年十二月下旬、老衰のために、遂に死去された。享年八十五歳。

先年の來翰に「加藤虎之亮博士（廣島高等師範出身）が、來訪されて、宮中からの賜り物だとて、鮮鯛を贈られた。舊誼を忘れず芳志を恵まれて、今更に追憶と感謝とで一杯です」と悦びを報して下さつたのも、今や悲しい形見となつた。

松山先生は、風貌、溫厚篤實、何事にも几帳面で、身形りも、常に、端正、坐臥進退は物靜かで、疾言遽色は見られない。平素默辯、戯語されたことはない。お附合は別として、自らの生活は儉素を旨とし、廉潔を操守された。強い責任感、固い意志の持主で、外は優々、内は剛毅。自ら律すること謹嚴であつたのに、人には寛容で、決して備はることを求められなかつた。是は天性なのか、將た、修養工夫の結果なのか知らないが、中々眞似も出來るものでなかつた。

親に孝、兄弟に友、といふ美點では、先生の評判は餘

りにも名高い。狩野先生が「中江藤樹先生を現代に生かしたもののが、松山君だよ」と言はれた。

若い時、父君の喪に遭はれて憾み多かったのであらう。多くの書翰を大切に保存して追憶の資とされてゐた。先生の遊學中に受けられた、巻紙に丹念に認められたもので筐に滿ちてゐた。

父君亡き後は、一層母堂の奉養に心をつくされて到らぬ所なかつた。家人も親戚も、皆範としたといふ。母堂孝養に關する問題が因を成し、先夫人と敢えて離婚された苦勞も経験してゐられる。幸ひ、繼室、市子夫人は先生の意を體して、克く、母堂に事へて孝養されたので、大に安堵された。

いつか、「結婚に、容色に重きをおくな、永い伴侣とするのだから、もっと、大事なものがあるよ」と種々、所懐を陳べて訓へて下さつた。

堂友が南河内の金剛寺見學に行つた時、私の母もお相伴した。寺の席上、先生御夫妻から、懇懃な待遇を蒙つて、母は全く恐縮して、この事を後々まで語り草にしてゐた。これは、弟子の老親にまで心遣ひされた先生の孝慈の表はれと思つて感激した。

若くして一家の柱となり、後、大學は出られたけれど、母堂を奉じ、一弟兩妹を擁しての御苦勞は、大抵で

はなかつた。外は講師の兼務、内は、母堂の奉養、弟妹の教育といふ劇しい毎日であったが、転て、弟、潔さんが藏前の高等工業を卒業。長妹、国子さんは陸軍々人町田氏、次妹、玉子さんは、醫師宇治木氏に嫁がれて、優しい兄君の苦心も空しからす美事に實を結んだ。

曾て、そんな懷古談の末に「この間に、遂に生家も土地も手放した。けれども、生家だけは、何とか取戻したいと念願してゐるが、欲しい本も碌々、購えない位だから、中々、急には思ひ通りにはならぬ」と嘆つてゐられた。

先生が展墓のため歸られると、明石市の親戚に宿泊されるが常であつた。その間中は不在かと思はれる位、静かに、書見したり、書き物をしてゐられたといふ。

家に在る時、夏と雖も、袴を着けて端坐されて、隋容の氣色もない。或る夏休み時季に、K先生と自分との子供を易へてみやうと、お互に預け合はれた。松山先生は、そんな恰好で、袖を捲くるか、團扇で涼を納れるか位であった。K先生の銷夏法は、全く自由で、自然に適應した身なりにしていかれるといふので、若い兩人が、餘り差違があるので驚いたといふ。

家人の話がはずんで、思はず、大聲で笑ひこけてゐると、書齋から手がなる。夫人が急いで伺はれると「餘り

大聲で笑ふな」とたしなめられた。

玉出時代に、結婚するまで勤めてゐた女中さんの話に、「先生はお優しく、とても思ひ遣が深い方です、偶に、粗相しましても、訓へられる言こそあれ、お叱りを受けたことはなかつた」と、私は聞いた。

先生が禮儀正しい方であつたことは言ふまでもない。理髪の時、職人が、ぞんざいに、頭を扱ふものがあるのを虞れて、北濱の或る高級理髪店が職人の躰がよいとて、何時も態々そこまで兄を連ばれた。

先生は、極めて義理堅く、舊誼を重んじ故舊に教かつた。明石の舊藩主の子息の教導を託された時、非常に繁劇な間をさいて、忠誠を以て膺られた。昔の藩主、その上母堂が仕へられた縁故もあって辭し兼ねられたのである。

舊友、白河鯉洋さんの歿後の世話で國民黨首、犬養毅さんとも交渉して、奔走された。往時、大患で九大病院で手術を施された、三宅速博士には、歿年まで挨拶を怠られたことはなかつた。

懷德堂での先生は講義の擔當は勿論、その他、教務、運營に關して企劃實行に専念され倦むことを知らぬ努力振りであつた。文科講義の開設には、大阪朝日新聞にその主旨を説明して勧誘する文章を掲載され、一面理事者

に説いて経費の釀出を確保された。日曜の朝講は、自らの休養を放棄して擔當され、果して、聽講者があるかと憂へられた向もあつたが、空堂でも講ずる意氣込みで開講された。文科講義は経費の面で廢止を見たが、日曜朝講は、先生のお蔭でよく續き、固定した人々が熱心に樂んで聽講した。静かな日曜の朝、廣い講堂で聖賢の道を聽く。この雰囲氣に浸つた者は、今でも忘れない。

堂の催しには常に權威ある學者の來講を次々に續けることが出来て、宛然、京都大學の夜間教室の觀を呈してゐた。京都から大阪への距離はあり、時刻は休養時の夜間、聽衆の雜多なこと等、出講の先生にも渺からぬ迷惑であるのに、斯くも應諾を得た裏には、狩野内藤兩顧問の斡旋の力がある。併し、又、松山先生が禮讓をつくして、而も根氣よく懇請された、十年一日の如き熱誠、粘り腰の御陰も大きい。先生が上京される時は常に手辨當持參であつて、そこにも堂費の節約を考慮してゐられた。狩野先生は「中々、出來ないことだよ、君達有難く思はねばならぬ」と訓へられた。

折目正しい先生に、初めはとりつき難く、聊か畏敬してゐた聽講生も、春風の如く穏かなその人柄に、いつしか惹きつけられて行つた。適々吉田先生の支那留學によつて生じた事務上の人手不足の手傳もあつて、若干の聽

講生は、俄かに先生に接する機會が繁くなり、親炙の度は、段々深まって來た。

これに依りて、堂の諸行事の一切には、先生が周到な指導に由つて、諸生は渾然一體と成つて、奉仕の役務に従事するに至つた。

凶事は別として、孔子歿後二千四百年記念の孔子祭、論語義疏の校刊等は意義深い思い出の一は數ふべきだ。先生が日常、徳性の涵養、實踐に重きをおき、身を以て範を垂れて居られたことは勿論である。然し、諸生の讀書力の養成に就ても心してあられた。欲する者には何時でも指導を吝まず、更に奨励された。

若い聽講者が輪讀會をやるに就て、小講堂の使用許可を願ひ出た時、直にその請を容れ、御自身も朝講の後の

お疲れも忘れて、指導して下さつた。日曜の朝、朝講を聽き終ると直後、二時間位、輪讀して勝手な熱を上げてゐるのにおつき合を、先生の歿年まで續けて下さつた。又、好む者には、唐本白文の書籍を私費で講ひ與へられ、先づ、句讀をきれと命せられた。記憶によると東塾讀書記、朱子年譜、經學通論等を戴いた。自信がないので、先づ2Bの鉛筆で、句讀をつけて見て載くといふ心細さであった。今川せい、高砂清一兩君の著しい進況を見せて來たのもこの提撕の賜物だ。

丁目から難波行の市電を利用してゐられた。山本君と私は、時々電車に乗られる迄お伴した。或る年、丁度今上陛下の御即位式の奉祝で町中賑つた。それで踊を觀ませうと二人が言ひだして、松屋町から盛り場を通つて難波まで御供して廻つた。奉祝踊、山車屋臺、町飾りで、俗めき亘つた道筋の雜踏をニコニコ觀てあられた。その中で、二井戸の古本屋の前に立つたら、先生は架上の書名を一々指摘して、その内容を、簡単に説明して下さつた。後日、この夜の踊見物について、或る聽講生の故老から「先生に對して失禮だ」と叱られた。しかし、當の先生は、御歸宅後「今日は賑やかな巷の行事を見物して廻つて遅くなつた」と愉快さうに家人に語られた由。

昭和二年二月、御病氣だとて、珍しく先生が缺講された。引籠つて靜養されたが、病は一向に怠らない。聽講生も漸く不安になつて來たので、苦しい時の神頼みといふことになつた。先生に叱られるかも知れないがと、吉田清徳といふ老人は、土清めをやつた。それは松山家の人が、無言で豊後町まで通つて書庫や生牆の土を清めるのである。そんな迷信は、如何なものかと贅躊してゐた人が、石切神社の御祈禱がよいと言ひ出して來た。そこで野口幸雄さんと私とが、先生の肌衣を拜借して、生駒山

麓の石切神社に詣でた。石切町長小松氏が、私の故舊なので、この人から神社の神官、木積さんと紹介して貰つて、特別の祈禱を請ふた。「木積家は藤戸寛齋といつて舊懷德堂の門人の家柄ですから」と木積さんは、入念に祈禱されて、護符を授けられた。それを御届けに行つたら、御病床に通されて、「格別の心費ひ誠に有難う」と、大患の惱みも知らぬ氣に落ちついてゐられ、却て恐縮した。

どうか早く御回春をと皆が願つてゐたが、病は遂に革つた。死期を覺られてか、意識の確かに裡に遺言をするとて、家人を集められた時、太田勘兵衛さんも立會を命ぜられた。落ついた平常の口調で、丁重な御挨拶を戴いて恐縮した太田さんが、後で語つてくれた。「死生を超越するとか、大悟徹底とかは先生の今の御心境をいふのがかなあ。昔、禪を學ばれた故計りではない。矢張り長い御修養を積まれた成果といふのであらうか、唯々、御立派と申上げる外ないなあ」と、感嘆してゐた。

太田さんは、その在世中、年に一度は、必ず明石本立寺へ展墓に行くことを怠らなかつた。ここに太田さんの面目が躍如としてゐる。

松山先生は古くから狩野先生に親炙してゐられた。當同學の先輩、堂の顧問といふだけではない。全く、兄事してゐられたし、狩野先生し亦格別な厚誼を以て酬られ

てゐたやうに見受けられる。西村先生の詩に、經師不易況人師、懷德堂中有表儀と松山先生を詠まれた句があるが、狩野先生は松山君は、天が懷德堂のためにこしらへたやうな人だと我々に訓へられた。又、狩野先生は、松山先生の病状を憂へられて、京大の看宿たる三人の國手の往診を斡旋されたり、先生歿後の後事にまで、一方ならぬ配慮をつくされて、美しい厚誼の一端は、よく窺ふことが出来る。

懷德堂の聽講生の中には内村九一、白井久吉、酒井全太郎の諸兄の如き、豊かな詞藻の持主があつた。殊に内村さんは京大の囑託であつた内村邦藏さんの甥で、詩も書も垢ぬけしてゐた。しかし、先生からは詞章の習作について、率先指導されることはないなかつた。年を假さば、或はどうなつてゐたかは知らぬ。先生の歿後、吉田先生が晩年岡山源六先生と別められた、詩會に二三子が加はつてゐた位のことであつた。

私は、生來の鈍才で、詞章など到底作る柄ではない。唯、懷德堂に於て或る威嚴と品格とを以て、一種の清高、嚴肅な氣風の許に、旦け暮れ、明道・教化に勤しまれた松山先生の聲咳に接して、その高徳深情に浴し、少しく文學を解し、聊か道を聽くことの出來たことを、此上ない俾せ者だと感謝してゐる。

松山先生が逝かれて、ここに四十年。去るものは日に疎しとはいふが、數々の憶ひ出は、猶新たなるものがあ

る。脈絡もないこの一文は、即ちそれである。
昭和四十一年八月晦

財津愛象先生の思い出

森 三樹三郎

大阪高等學校に勤められていた財津先生に、私が學生として學んだのは、昭和二年から三年にかけての頃であったように記憶する。當時、中國哲學を專攻することなど夢にも考えていなかつた私に、先生について語る資格は全くないといってよい。ただ、この年令の學生に共通する特徴として、自分は學力をもたないくせに、先生の學問熱の高低を本能に読みとる直感力だけは、どうやら備えていたようである。その本能的な直感によると、財津先生は人なみはずれた學問好きの方であり、その學問の深さは底が知れぬという感じであった。同時に、漢學

は、そのまま明治育ちの漢學者と、大正昭和の育ちの支那學者との間にある落差であるともいえよう。少年時代から素讀に親しんできた人と、横文字好きの素人から轉業したものとでは、もともと比較することが無理である。近ごろ、新制大學生の漢文讀解力の低下が歎かれてゐるが、それよりも一そう甚だしい低下が、過去においてもあつたのである。

後年、思いもかけず中國哲學を專攻するようになつてからは、ますます先生の學問の豊かさを痛感し、自分の

財津先生が京都大學を出られた當時には、高等師範學校を經由した人が多かつたようであるが、先生もその一